

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520129

研究課題名(和文) インドと中国の供養者(寄進者)像に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study on the Donor Figures in Ancient India and China

研究代表者

石松 日奈子 (Ishimatsu, Hinako)

清泉女子大学・文学部・その他

研究者番号：80424307

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：(1) インドと中国で全4回の現地調査を実施し、供養者(寄進者)像の作例に関するデータを収集した。インド：マトゥラー博物館、ラクナウ州立博物館、サルナート考古学博物館、BHUバナーラスヒन्दゥー大学美術館、ブッダガヤー考古学博物館、パトナー博物館、カルカッタインド美術館、アウランガーバード石窟、ピタルコーラ石窟、アジャンター石窟、ニューデリー国立博物館、チャンディガル博物館。中国：河北省博物館、西安碑林博物館、西安博物院、山東省の12の博物館。

(2) インドにおける供養者像の展開について考察した。また、供養者像の配置や肖像性についてインドと中国の作例を比較した。

(3) 研究成果報告書を作成した。

研究成果の概要(英文)：(1) I did the research for four times in India and China, and collected the data about the donor figures represented in religious arts. In India, I visited Mathura Museum, Lucknow State Museum, Sarnath Archeology Museum, the BHU Benares Hindu University Museum, Buddh Gaya Archeology Museum, Patna Museum, Calcutta India Museum, Aurangabad Caves, Pithalkara Caves, Ajanta Caves, New Delhi National Museum, and Chandigarh Museum. In China, I made my research in Hebei Museum, Xi'an Beilin Museum, Xi'an City Museum, and twelve museums of Shangdong Province.

(2) I considered the development of the donor figures in India. And, I compared the Chinese examples with India about placement and portrait characteristics.

(3) I made a report about the research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美術史

キーワード：インド 中国 供養者像 寄進者像 仏教 ジャイナ教 ヒन्दゥー教 道教

1. 研究開始当初の背景

宗教的な造形物をつくり、まつり、拝む行為を、仏教では「供養」と呼び、その行為者を「供養者」と呼ぶ。研究代表者はこれまでに中国および中央アジア(新疆)地区の仏教遺跡や遺物を調査して供養者の姿を造形化した「供養者像」に関するデータを収集し、その造形上の特色を詳しく観察することで、従来の美術史で気付かれなかった情報を引き出し、造寺造仏をとりまく新たな解釈を提示してきた。その内容は日本や中国、韓国の学会で口頭または論文発表した(『北魏仏教造像史の研究』2005年、「北魏美術中の胡服像」『中国史研究』35輯 韓国2005年。「中国仏教造像の供養者像 仏教美術史研究の新たな視点」『美術史』160号 2006年、中文訳は2009年に発表。「敦煌莫高窟第二八五窟の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』131号 2010年)。

さらに、平成20年度から3年間、科学研究費補助金の交付を受けて、「古代中国・中央アジアの仏教供養者像に関する調査研究」(基盤研究(C)課題番号20520092。研究代表者:石松日奈子)と題する研究を行い、中国の華北~新疆にかけての仏教遺跡や造像を調査した。供養者集団の構成や供養者像の表現には一定の共通点があるいっぽうで、時代や地域、国家や民族などに起因する様々な特色が認められた。とくに供養者像の服飾表現には当時の社会の支配構造や集団内での階級差が反映されており、さらに男女の配置や序列に中国的な倫理観を見ることができた。また民間の作例では墓葬美術の伝統的な図像を利用している例が多く、仏教造像を利用して祖先崇拝や葬送儀礼をおこなっていた可能性が高いことも確認できた。

これらの研究成果をとおして、供養者像の起源とその意味や機能についてさらに研究を深めるためには、地域と時代をインドやガンダーラまで広げる必要があると思われた。

2. 研究の目的

上記のような問題認識に基づいた本研究の目的は以下のとおりである。

(1) 供養者像という図像の意味と機能を明らかにする。とくに、「実在する寄進者」と「図像としての供養者像」のちがいに着目する。

(2) 古代インドやガンダーラの作例に遡ってデータを集める。そのために、インド各地で実査を行う。仏教作品だけでなく、仏教と共通する造形表現をもち、かつ、より民族性を色濃く反映するヒンドゥー教やジャイナ教の美術も対象とする。とくに供養者像の部分写真を詳しく撮影する。

(3) 中国の仏教供養者像について、過去の調査が不十分な地域として、山東、河北、四川、江蘇で追加調査を行う。また、中国の伝統思想である道教の作例についても供養者像のデータを集める。

(4) インドと中国の供養者(寄進者)像の表現を分析し、両地域の表現の共通性と相違点を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 対象作品の選定

参考文献により検討すべき対象作品を選定し、図版はスキャニングし、データファイルを作成する。

(2) 現地調査

選定した作品について、現地調査すべきものを厳選する。3カ年の研究期間のうち、2年間はインド調査、1年間は中国調査に充てることとした。インド調査は平成23年度と24年度に各1回で、インド各地の博物館と西インドの石窟寺院遺蹟など。中国調査は25年度に計2回とし、四川省と江蘇省、山東省を予定した。

なお、欧米の美術館や博物館にも本テーマに関連する単体作品が収蔵されているが、今回の計画ではインドと中国での現地調査に集中し、流出分の作品については別の機会を期すこととした。

(3) 調査データの整理と保存

調査で得たデータや写真は学生アルバイトを雇用してコンピュータで整理・保存することとした。

(4) 研究成果の発信

学術誌や出版物による論文発表や、学会等での口頭発表などで研究成果を報告するとともに、最終年度に研究成果報告書を作成する。

4. 研究成果

(1) 実施した調査の概要

平成23(2011)年度 第1回インド調査。

時期:2011年12月17日~26日。

調査員:石松日奈子(清泉女子大学、研究代表者) 福山泰子(龍谷大学、研究協力者) 芹生春菜(東京藝術大学、研究協力者)。

訪問先:マトゥラー博物館(陳列室、収蔵庫)、ラクナウ州立博物館(陳列室、収蔵庫) サールナート考古学博物館(陳列室)、BHU パナースヒンドゥー大学美術館(陳列室)、ブッダガヤー考古学博物館(陳列室)、パトナー博物館(陳列室)、コルカタ(カルカッタ)インド美術館(陳列室)。

平成24(2012)年度 第2回インド調査。

時期:2013年2月17日~25日。

調査員:石松日奈子(清泉女子大学、研究代表者) 福山泰子(龍谷大学、研究協力者) 芹生春菜(東京藝術大学、研究協力者)。

訪問先:アウランガーバード石窟、ピタルコーラ石窟、アジャンター石窟、ニューデリー国立博物館(陳列室)、チャンディガル博物館(陳列室、収蔵庫)。

平成25(2013)年度 第1回中国調査。

時期:2013年8月26日~31日。

調査員:石松日奈子(清泉女子大学、研究代表者) 小森陽子(中国科学技術大学、研

究協力者) 徐男英(京都大学博士、研究協力者)

訪問先: 山東省博物館(陳列室)、済南石刻芸術館(陳列室、拓本調査)、河北省博物館(陳列室)、西安碑林博物館(陳列室)、西安博物院(陳列室)

平成25(2013)年度 第2回中国調査。

時期: 2013年12月20日~26日。

調査員: 石松日奈子(清泉女子大学、研究代表者)

訪問先: 青島市博物館(陳列室)、臨朐県博物館(陳列室、収蔵庫)、博興県興国寺丈八大仏、博興県博物館(陳列室)、山東省博物館(陳列室)、曲阜漢魏碑刻陳列館(陳列室)、武氏墓群石刻博物館(陳列室)、巨野県博物館(文廟、陳列室)、兗州市博物館(陳列室)、沂南漢墓(陳列室)、臨沂市博物館(陳列室)

なお、当初調査を予定していた四川省は、2008年の四川大地震後の復旧が遅れているために、成都市博物館や考古隊の陳列が閉鎖状態で、収蔵庫内の作品も破損したままであったため、正式の調査は行えなかった。また江蘇省については、近年の発掘で出土した金銅仏や塑像が注目されるが、これらはまだ整理中で外国人に公開できないとのことであった。そこで、これらの地域での調査を断念、計画を一部変更して、山東省を重点的に調査することにした。山東では北朝地域の定番であった立像・列像形式とは異なり、坐像形式の供養者像が多数見られ、江南との関係が今後重要になると思われる。

(2) 調査データの整理・保存

写真データは所在別、作品別にファイルを作って整理・保存している。また、パソコン内で作品ごとのデータカードを作成し、在銘像については可能な限り先行する碑銘関係の研究(静谷正雄『インド仏教碑銘目録』、定方晟『アジャンター刻文の和訳』、『マトゥラー刻文の和訳』、塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』ほか)と照合し、その内容を付記した。

なお、最終年度に作成した成果報告書(私製。簡易製本)に「供養者像作例目録 インド」を掲載し、本研究のインド現地調査で実査した作品を収録した。

(3) 考察

供養者像と寄進者

供養者像には、図像によって寄進を記録すること、さらに寄進者の代替として供養行為を行うこと、この二つの機能がある。

寄進の記録は本来文字銘でなされたはずであるが、文字を読めない人々にとって「像」は都合のよい記録法であったと考えられる。

また、供養者像は単に文字銘の代わりというだけでなく、寄進者の代替として仏陀や菩薩に供養をおこなうという、文字以上の機能を有していた。

インドの供養者(寄進者)像

古代インド美術において、ブッダやストゥ

ーパ、聖樹などに対する「供養」の場面は、紀元前のブッダなき仏伝図中に認められる。ただし、そこに表された供養者は説話の中の人物であって、実際にストゥーパを寄進した人ではない。実際に寄進したことの記録は主に文字銘で残された。

その後クシャン朝になると、現実世界の寄進者が造形の中に供養者像として登場するようになった。マトゥラーでは仏教ばかりでなくジャイナ教やヒンドゥー教の造像においても「寄進者としての供養者像」が多数認められる。供養者像という図像はクシャン朝に出現し、発展したと推測される。外来のクシャン民族によるインド支配が、民族や宗教の多様化と造像供養の普及を促進し、その結果、文字銘より単純で明解な供養者像という新たな「図像による寄進銘」が好まれたのではないだろうか。

とくにガンダーラの作品では、供養者像の存在感が強く、仏伝図中に描き込む例や、兜率天の弥勒菩薩のすぐそばに配される例も多い。それらの作品の中で、寄進者たちは供養者像という図像に自らを託し、時空を超えて仏陀や弥勒と同じ世界に存在し、より直接的に供養を行っている。

その後もグプタ時代にかけて、中インドや西インドの礼拝像や石窟造像において供養者像は活用され、一部では大型化、立体化した。とくにアジャンター石窟やアウランガーバード石窟では、等身大の丸彫りの世俗供養者像を本尊の前方や側壁に造りだし、臨場感あふれる「供養」の状景を演出している。

インドの供養者像は、基本的には男女を左右に分けるが、アジャンター石窟やアウランガーバード石窟などでは豪華な宝飾品を身につけた貴顕集団が男女混成で造られており、中央アジア新疆地区のキジル石窟などに男女混成の王侯寄進者像が描かれている状況と共通する。

供養者像の構成と配置

異なる文化圏である中国においても、異民族が支配した北魏時代(5世紀)に胡服(鮮卑服)の供養者像が出現し、その図像構成にはインドと共通する点も多いが、異なる点もある。たとえば尊像の基台部に比丘や男女の世俗者が並列する構成はガンダーラやマトゥラーの彫刻に通ずるが、中国では男女を厳格に分けて配置し、男女混成はほとんど見られない。同一集団内に夫婦や親子の男女が含まれている場合でも、男性グループと女性グループに分け、さらに長幼の序列にしたがっている。また、供養者像の配置場所も、男性上位、年長者上位となり、女性年少者の像は画面の端や背面に置かれる場合が多い。このような供養者像の配置における男女、長幼の序列は、儒教思想を基盤とする漢文化圏の状況を反映しているといえる。

供養者像の肖像性と写実表現

寄進者の代替である供養者像の肖像性や写実的描写の有無について、女性供養者像を

例に考えてみた。

中国の女性供養者像は髪型や服装で少女か成人女性かを描き分けている。ただし、老年女性の像には老相表現が見えず、榜題に「祖母」「母」「妻」などの表記があっても、像そのものには年齢の違いが見あたらない。これに対してガンダーラ彫刻では、服装や髪型だけでなく、年長の女性の顔に深い皺を刻むなど、老年としての面貌表現が認められた。

では、中国の供養者像が描写力において劣っていたのかといえ、そうではなく、中国の場合、供養者像に寄進者個人の外形を忠実に表現しようという意識そのものが希薄であったと思われる。肖像あるいは人物像に対するこのような態度は、中国で漢代以来描かれてきた聖賢画や功臣図など顕彰的な意味をもつ肖像画製作において育まれてきたと考えられる。ここで画家に求められたのはあるがままの形態を描写するのではなく、人物画や肖像画としての理想的な「典型」を表現することであった。中国古代美術の人物像に個性が感じられないのは、聖人の典型、賢人の典型、烈女の典型といった類型をもとにして描かれているためである。なお、女性供養者像における老相表現の欠如に関しては、中国で女性の老相に対するマイナスイメージが強いことに原因している可能性がある(石松日奈子「供養者像 図像による寄進銘」『仏教美術論集 第5巻』竹林舎、2014年)。

今後の課題

インド作品に関しては、造像銘等の解読を進めて、寄進者の個別の造像背景を解明する必要がある。また、本研究で対象としなかった欧米所在の作例について、将来調査の機会を持ちたい。

中国関係では、山東の坐像形式で表される供養者像についてさらに江南との関係も視野に入れて検討している。また、道教や道仏混淆の供養者像についても報告を準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計 2 件)

石松日奈子「供養者像 図像による寄進銘」『仏教美術論集 第5巻』竹林舎、2014年、pp179-199。

石松日奈子「敦煌莫高窟第275窟の造営年代について 供養者図像による北魏造営説を中心に」『敦煌・絲綢之路国際学術研討会議論文集』(国際シンポジウム報告書)神戸大学大学院人文科学研究科美術史学 百橋研究室、2013年、pp55-74。

【学会発表】(計 4 件)

石松日奈子「敦煌莫高窟第285窟北壁と東壁の説法図壁画」(シンポジウム「敦煌芸術の科学的復原研究 壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチ」東京文化財

研究所)2014年。

石松日奈子「中国式如来像の北魏的展開 雲岡第16窟大仏と地方造像」(国際ワークショップ「仏教石刻と地域社会 中国中世における地域史的宗教環境の探求」龍谷大学アジア仏教文化センター)2014年。

石松日奈子「雲岡石窟の中国式如来像について 身体表現と着衣」(ワークショップ「雲岡石窟研究の現在」京都大学人文科学研究所)2013年。

石松日奈子「敦煌莫高窟第275窟の造営年代について 供養者図像による北魏造営説を中心に」(国際シンポジウム『敦煌・絲綢之路国際学術研討会』神戸大学大学院人文科学研究科美術史学 百橋研究室)2012年。

【図書】(計 2 件)

石松日奈子『インドと中国の供養者(寄進者)像に関する比較研究』(平成23~25年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号23520129)成果報告書、2014年、pp1-109。

石松日奈子、中川原育子、影山悦子『古代中国をとりまく胡漢諸民族の服飾に関する調査研究』(平成21~23年度文部科学省委託服飾文化共同研究拠点事業報告 研究代表者: 成果報告書、2012年、pp8-51。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石松日奈子 (ISHIMATSU, Hinako)

清泉女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号: 80424307